

禅林寺 3（後期）

永観堂の歴史における 3 期目は、静遍僧都(1166–1224)の 12 代住職就任から、13 代証空上人(1177–1247)を経て、今日に至るまでである。この期間に、永観堂は浄土宗の寺院となったが、応仁の乱（1467–1477）でほぼ破壊された。

静遍僧都以前の永観律師と同様に、静遍僧都はもともと真言密教の僧であったが、浄土佛教（浄土宗）に強い関心を抱いていた。浄土宗は法然上人（1133–1212）によって設立され、その基本は「南無阿弥陀佛」を唱えることであった。念佛を唱える信者は悟りを開き、西にある極楽浄土に容易に生まれ変わることができる信じられていた。

仁和寺（にんなじ）で修業していたとき静遍は、批判するつもりで法然上人の著書「選択（せんちゃく）本願念佛集」を読み返すうちに自分の非を悟り、代わりに浄土宗の教えに完全に帰依した。それ以降、静遍は真言宗だけでなく、浄土宗も説教した。

静遍僧都によって、現在永観堂は浄土宗の寺院になった。静遍が永観堂に入って住職になった際に、まず法然上人 11 代の住職へと組み込み、地震は 12 代となった。そして高弟であった西山証空上人（せいざん・しょうくうしょうにん）に、その地位を譲って引退した。証空上人は最終的に浄土宗西山派を設立した。その弟子である浄音上人（じょうおんしょうにん）（1201–1271）に住職を渡し、永観堂はそれ以後、浄土宗西山派の寺院となった。

15 世紀、京は応仁の乱(1467–1477)の真っただ中であつた。これは足利幕府の将軍継承問題が原因で始まった軍事紛争であり、ほぼ 11 年におよぶ全国的な内戦に発展した。乱の最初の年に、永観堂は戦闘の最中にほぼ完全に焼失してしまったが、1472 年から 1479 年の間に大部分の建物が再建された。